

多くのオペラ・ファンは、ある作品を体験する以前に、その作品の中のアリアを聴いていて、その後で全曲を体験するという手順を踏むものじゃないだろうか？ 私の《ジャンニ・スキッキ》体験の最初もそうだった。そして、全曲を聴き終えたときの腹立たしさと言ったら！ 恥ずかしさと言ったら！ そう、《私のお父さん》を既に聴き知っていたのである。このアリアの最後、〈ピエタ……ピエタ……〉で、泣き虫の私はこみ上げてくるものを我慢するのが今でもたいへんなのだ。こんなにすばらしいアリアを持った作品なのだから、さぞかし哀しい恋の物語りなのだろう、と想像していたのである。

《ジャンニ・スキッキ》を聴くときはこの恥ずかしさやら腹立たしさを思い出してしまうのだが、ラハバリの指揮はサラツとしてちつとも湿っぽくないのがいい。コメディらしく軽快でダイナミズムも適度に抑えられているように感じる。歌手は一流どころではないが、充分に健闘している。

## Puccini



### ブッチーニ：歌劇 《ジャンニ・スキッキ》

アレグザンダー・ラハバリ指揮マラガ交響楽団、アルベルト・リナルディ (Br) タチャーナ・リズニク (S) 他  
〈録音:2002年4月〉  
[Naxos©8.660111]